

令和 5 年 5 月 19 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K10920

研究課題名（和文）PICUで終末期を迎えた子どもの両親への情報提供と end-of-lifeケア

研究課題名（英文）Providing Information and End-of-life Care to Parents of Children in the PICU

研究代表者

戈木クレイグヒル 滋子（SAIKI-CRAIGHILL, Shigeko）

慶應義塾大学・看護医療学部（信濃町）・教授

研究者番号：10161845

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：新型コロナウイルスの感染拡大により、研究計画を修正し、リモート会議システムによってデータ収集が可能な内容に絞って、「小児集中治療室（以下PICU）で終末期を迎えた子どもの両親と関わった医療者は、両親の様子をどう捉え、どのような意図で何を行ったのか」について検討した。34名の看護師にインタビューを行い、収集したデータを分析した結果、【看取りへの後押し】という現象が明らかになった。くわえて、本助成開始前に収集した、PICU入院児に家族が面会する15場面の観察データと、医療者15名へのインタビューデータを分析し、【きょうだいの居場所をつくる】という現象を把握した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通して、PICUで終末期と判断された子どもの両親に対して、看護師が、他の医療者と協力し、両親の意向に配慮しながら闘病環境を整え、家族がよい時間を過ごすことができるように【看取りへの後押し】をしていることが分かった。同時に、適切な【看取りへの後押し】を行うためには、情報を医療者間で共有することや、医療者自身が疲弊しないようにサポートし合うことが重要であることもわかった。本研究の結果は、プリミティブながらも、今後のPICUにおけるend-of-lifeケアの検討につながるものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Due to the spread of the Covid 19, we revised our research plan and focused on elements that could be collected with a remote conferencing system. We studied medical professionals who worked with the parents of children at the end-of-life stage in the pediatric intensive care unit (PICU). We looked at how these medical professionals grasped the situation of the parents and how they developed their approach toward the families. As a result of interviewing 34 nurses and analyzing the collected data, the phenomenon of “Supporting from Behind” was revealed.

In addition, we analyzed observational data from 15 situations where families visited children in PICUs as well as interview data from 15 medical professionals collected before the start of this grant, and were able to clarify the phenomenon of “Making a Place for Siblings”.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児集中治療室 end-of-lifeケア ターミナルケア 情報共有

## 1. 研究開始当初の背景

申請者らは、これまで、子どもが小児集中治療室(以下、PICU)に入室中に両親が何を体験するのかを質的研究で捉え、量的研究で把握した両親のストレス・不安の度合いとその経時的変化を含めて、混合研究法を用い、米国との比較も踏まえて検討してきた。その中で、米国ほどではないものの、両親の経験するストレスは日本でも高いことがわかった(西名他, 2018; 岩田他, 2018)。くわえて、小児集中治療医が交代で 24 時間管理する体制では、日々異なる医師が担当するために、医師とのコミュニケーションが十分にとれず、子どもを任せることに不安を抱く両親が少なくないことも明らかになった(戈木C他, 2018)。

これまでの研究では、主に子どもが回復に向かっている両親を対象にしたが、それでさえ、上述した通り両親のストレスや不安の度合いは高かった。これが、子どもの生命を救うことが困難な場合には、両親のストレスや不安はさらに高まるものと推測される。しかし、それをケアする医療者側の状況をみると、小児集中治療医の面談には情緒的なサポートが少ない傾向があり(Ciriello 他, 2017)、end-of-life ケアを苦手だと感じる医療者が多いと指摘されている(Jones&Cater, 2010)。くわえて、日本の小児集中治療医を対象とした調査では、end-of-life ケアの教育が行われていない施設がほとんどだという結果も示されている(Seino 他, 2019)。

以上から、PICU で死に向かう子どもの両親に対する、適切な情報提供と end-of-life ケアのあり方を検討する必要性は明らかである。しかし、未だ、PICU における情報提供と end-of-life ケアの実態が明らかにされていない段階にあるため、本研究では、終末期と判断された子どもの両親に、医療者がどのような情報提供と end-of-life ケアを行い、両者間でどのようなやり取りが行われているのか。それが、両親にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにしたいと考えた。

## 2. 研究目的

PICU で終末期と判断された子どもの両親に、医療者はどのような情報提供と end-of-life ケアを行っているのか。その中で、医療者と両親との間にはどのようなやり取りがあり、それは、両親にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。

## 3. 研究方法

1) 研究デザイン: 質的探索的研究

2) データ収集方法: 以下の参加観察を行ない、分析後にインタビューを行う。

### (1) 参加観察

PICU で終末期と判断された子どもの両親と医療者との医療面談場面に立ち会い、両親と医療者間のやり取りを観察する。

### (2) インタビュー

① PICU で終末期と判断された子どもの両親: 両親が医療面談の場での医療者の説明や関わりをどう感じ、どう理解したのかについて話してもらおう。

② PICU で終末期と判断された子どもの両親と関わった医療者: 医療者は両親の様子をどう

捉え、どのような意図で何を行ったのかを話してもらおう。

### 3) データ分析

データ分析では、医療者からの情報提供と end-of-life ケアによって、医療者と両親との間にどのような相互作用が生じ、それが両親の体験にどう影響するのかというプロセスを把握する。本研究の特性から考えて、数多くの相互作用のプロセスを把握することによって結果の普遍化を目指す、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いる。(Strauss, 1987,1998; 戈木C,2013,2016)

## 4. 研究成果

本研究は2つの小児専門病院で行うこととなっていた。研究初年度である 2020 年4月に、両病院 PICU における両親への医療面談場面の観察と、インタビューによるデータ収集を開始した。しかし、2事例の観察データおよびインタビューデータを収集した時点で、新型コロナウイルス感染症の流行拡大により、両病院に部外者が立ち入ることができなくなってしまった。

状況が改善する時期を待ってデータ収集を再開しようとしたが、いつまでも再開の見通しが立たないため、最終的に、状態がもとに戻るまでの変更案を考えざるを得なくなり、研究対象と方法を変更した。(そして、結果的に、助成期間中に状態が戻ることはなかった。)

変更後の研究では、もともと計画した上記3-2)-(2)インタビューの「②PICU で終末期と判断された子どもの両親と関わった医療者:医療者は両親の様子をどう捉え、どのような意図で何を行ったのかを話してもらおう。」を中心とし、リモート会議システムを利用して、医療者に PICU で終末期と判断された子どもの両親と関わった具体的な体験事例をあげてもらい、両親の様子をどう捉え、どのような意図で、何を行ったのかについての話を聞いた。そして、このデータを分析した結果、【看取りへの後押し】という現象が明らかになった。

くわえて、家族の状況を把握するために、本助成研究の開始前に収集していた、PICU 入院児に家族が面会する場面の観察データと、医療者へのインタビューデータを分析し、【きょうだいの居場所をつくる】という現象を把握し、論文として発表した。以下、これら2つの現象について説明したい。

### 1)【看取りへの後押し】という現象

国内 9 施設、34 名の看護師にインタビューを行い、収集したデータを分析した結果、【看取りへの後押し】という現象が明らかになった。(図1) このカテゴリー関連図はまだ暫定的なものであるため、今後さらにデータ収集と分析を重ねた上で、論文として発表する予定である。ここでは、現段階での分析結果を説明する。

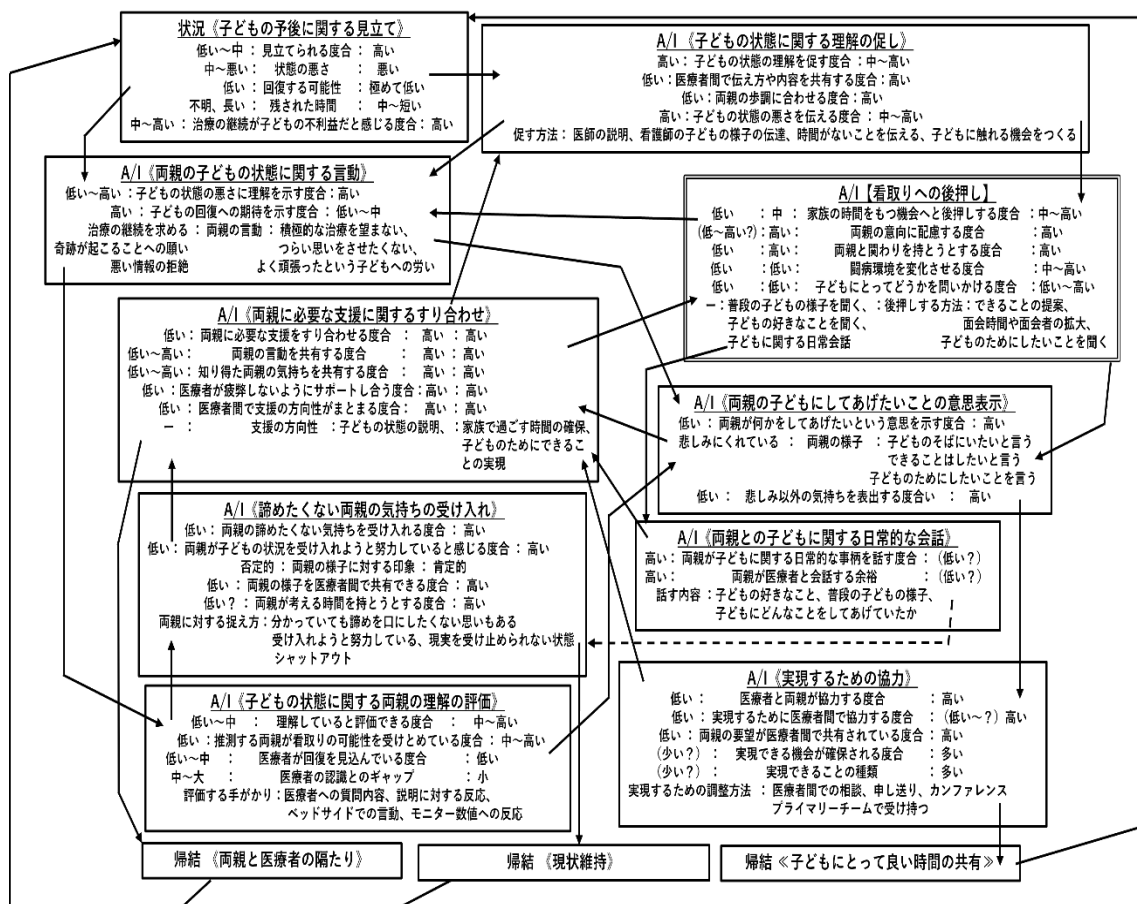


図1.【看取りへの後押し】という現象に関するカテゴリー関連図(暫定版)

看護師たちは、医師や他の医療者と協力しながら、PICU で終末期と判断された子どもの両親に対して、子どものためにできることを提案したり、面会時間の調整、面会者の拡大、両親が子どものためにしたいことを聞くといった方法で、両親の意向に配慮しながら、時に、両親に子どもにとってどうかということを開きかけながら、家族がよい時間を過ごすことができるような状況を作ろうとしていた。

医療者が適切な【看取りへの後押し】を行うためには、両親の言動やそれを通して推測される気持ちに関する情報を医療者間で共有することや、医療者自身が疲弊しないようにサポートし合うことが重要であり、子どもの状態を、両親にいつ、どう伝えるかを医療者間で検討し、両親の歩調に合わせながら、両親の理解を促すことが必要であることもわかった。

## 2)【きょうだいの居場所をつくる】という現象

PICU 入院児に、そのきょうだいが見会する場面を観察した 8 事例 15 場面の観察データと、PICU 入院児と面会するきょうだいと関わった経験をもつ医療者 15 名へのインタビューデータを分析した。観察、インタビューともに終末期の事例が含まれており、分析によって、【きょうだいの居場所をつくる】という現象を把握することができた。(図2)



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Nishina Ryohei, Saiki-Craighill Shigeko, Iwata Masayuki	4. 巻 41
2. 論文標題 Making a Place for Siblings: Support for Siblings Visiting Children Hospitalized in PICUs	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Japan Academy of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 395 ~ 404
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.41.395	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 増田 真也, 岩田 真幸, 西名 諒平, 清水 称喜, 中田 諭, 村山 有利子, 西川 菜央, 辻尾 有利子, 戈木 クレイグヒル 滋子	4. 巻 -
2. 論文標題 テキストマイニングによる集中治療室入室児の親の不安の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Health Psychology Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西名諒平, 岩田真幸, 戈木クレイグヒル滋子, 他30名	4. 巻 79
2. 論文標題 小児集中治療室入院児の両親の不安・抑うつ・PTSDの実態と経時的変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 140-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西名諒平、 戈木クレイグヒル滋子
2. 発表標題 質的アプローチの多様性への理解をひろげる-「生きづらさ」をめぐるデータ分析から： グラウンデッド・セオリー・アプローチによる検討
3. 学会等名 日本質的心理学会 第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西名諒平、 戈木クレイグヒル滋子
2. 発表標題 看取りへの後押し-PICUで子どもを亡くす両親への働きかけ
3. 学会等名 第29回小児集中治療ワークショップ
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 西名諒平	4. 発行年 2023年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 150
3. 書名 小児集中治療室入院児と面会するきょうだいの支援（仮）	

1. 著者名 戈木クレイグヒル滋子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 192
3. 書名 グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた研究ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西名 諒平  (NISHINA Ryohei)  (70770577)	神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・講師   (22702)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宗 皓  (SOU Hikari)  (80876970)	慶應義塾大学・看護医療学部（信濃町）・助教    (32612)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関